

[総合的な学習の時間]

他者と協働して主体的に取り組む学習過程の創造

—横断的、総合的な活動を中心に—

南雲 民人*

1 研究の目的

「将来のために」と、子供のかけがえのない今を犠牲にするような教育活動を行っていないだろうか。平野は「本来は能動的な学習者であった子どもが、幼児期の家庭教育やその後の学校教育によってだんだん受動的な子どもにさせられてしまったのであろう。子どもは、もともと自ら学んで伸びようとしているのであるから、まずはそのことを大事にして、それに添って活動が展開し、その意欲そのものがさらに高まるように授業を構成していくことが、私たちの願う授業のあり方ではなかろうか。¹⁾」と述べているように、子供を能動的学習者として捉え、活動意欲が高まる授業構成を提起している。

子供にとって子供の今を精一杯生きることが大切で、子供が何かを楽しみに登校し、仲間と共に主体的に、協働的に活動に没頭する姿が小学校という学校生活の中での真の姿であると考ええる。

中央教育審議会答申では、主体的に学ぶこと、協働的に学ぶことの意義を説明するに当たり、人工知能にない人間の強みについて次のように言及している。「人工知能がいかに進化しようとも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理である。一方で人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。多様な文脈が複雑に入り交じった環境の中でも、場面や状況を理解して自ら目的を設定し、その目的に応じて必要な情報を見だし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができるという強みをもっている。²⁾」

この記述では、人工知能にできなくて人間にできるものとして、自ら考え出すことと多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだすことをあげ、それらが人間の強みであると説いている。筆者は、この二点の人間の強みが学校生活の中でいかに発揮される教育活動を目指したいと考える。

子供が主体的に協働的に学ぶ教育活動はどの教科でも実現可能であろうが、筆者は総合的な学習の時間に活路を見だしたい。牛山が、「総合的な学習が、子どもの頭と体と気持ちを織り合わせ、まるごと表現されるような学びであるとき、子どもはやりがいを感じ、学校を我がものとする。³⁾」と述べていることから、総合的な学習の時間の充実が学校生活の充実につながることを示唆していることが伺える。

しかし、現実には厳しい。総合的な学習の時間は年間70時間という限られた時間の中での活動構想が求められる。時数の少なさから各学期1、2回程度の単発の体験活動に陥ることが考えられるが、先の牛山が「根の浅い体験は、子どもの思いを刻まない。確かな知力や行動力を育てない。⁴⁾」と述べているように、それでは子供にとっても教師にとってもおぞましい結末を迎えるだけではなかろうか。

そこで、他者と協働しながら活動に没頭していく子供を軸に、横断的で、総合的な活動の連動を呼び込む学習過程の創造を試みたいと考えた。

また、他者との協働に関わって、『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』では協働的に学ぶことの意義について次の三点が記されている。

- (1) 多様な情報の収集に触れること
- (2) 異なる視点から検討ができること
- (3) 地域の人と交流したり友達と一緒に学習したりすることが、相手意識を生み出したり、学習活動のパートナーと

*上越市立大潟町小学校

しての仲間意識を生み出したりすること

これらの三点について、実践における子供の姿から検証したいと考えた。

2 実践の構想と研究の方法

本実践は、他者と協働して主体的に取り組む学習過程を大切にするために、情報収集及び検討の必要性が発生したり、地域に出かけて他者と交流したりすることが起こり得る横断的で総合的な学習材を選定し、活動を構想する。そして、前述した三つの協働的に学ぶことの意義について検証していくことにした。

(1) 実践の構想

4年生の「どんど学習」（総合的な学習の時間）である「カイコのおくりもの」では、カイコの飼育を通して、生命現象の神秘さと不思議さを感じ取るとともに、地域の人々や自然に興味・関心を持ち、それらに進んで関わろうとする子供の姿をねらって構想した。（表1参照）

〈表1 活動の構想〉

| | 学習活動 | 横断的、総合的な視点 | 他者との協働に関わって |
|-----|--|---|---|
| 一学期 | ・ 桑の木、桑の葉探し ・ カイコのお世話① ・ 桑の葉取り ・ カイコの繭部屋作り ・ 生糸取り ・ 桑の実、桑の葉料理 | 情報収集、地域交流 生命 情報収集、地域交流 ものづくり ものづくり 食 | (1)(2)(3) (3) (3) (3) (3) (1)(3) |
| 二学期 | ・ カイコのお世話② ・ 桑の葉取り ・ カイコの繭部屋作り ・ 糸を使った作品作り ・ 繭玉工作（区文化祭出展） ・ 大湊区のカイコの歴史を探る ・ お年寄りとの繭玉交流 | 生命 情報収集、地域交流 ものづくり ものづくり ものづくり 地域の歴史 福祉 | (3) (1)(3) (3) (3) (2)(3) (3) (3) |
| 三学期 | ・ 1年の活動のまとめ「カイコスゴロク」の作成 ・ カイコからおくられたものについて考える | ものづくり キャリア | (2)(3) (2) |

※ 表中の「他者との協働に関わって」の（ ）数字は、前述の協働的に学ぶことの意義の三点を示す。

平成25年大湊町小学校発行の社会科副読本『わたしたちの大湊』によると、明治から昭和の初期にかけて、大湊区では養蚕業が盛んで、砂丘地帯にはカイコのえさとなるたくさんの桑畑があった。当時は生糸が日本の最大の輸出品であり、大湊区の人々にとっても重要な産業であった。しかし、ナイロンなどの化学繊維の発明により養蚕業は衰退し、砂丘にあった桑畑は姿を消した。今では桑の木は家の境界線の目印にわずかに残っているほどである。

このカイコという学習材には、たくさんの魅力があると考えられる。まず、大湊の歴史を探るきっかけとなることである。子供の祖父母や曾祖父母が子供の頃にカイコを飼っていたことから、家族や地域住民から情報収集することが可能である。

また、子供同士で協力して飼育することができ、桑探しや桑集めを通して地域住民とつながることができる。そして、カイコが繭を作り、その繭から生糸をとることで生き物の神秘を感じ取ることができる。

さらに、糸や繭玉を使った工作では、子供が創造性を働かせて新たなものを生み出す機会となる。

このように、カイコとのかかわりを通して、カイコやカイコに関わる人、もの、ことから様々なことを感じ考え、自分の世界を広げていく子供の姿を期待した。

(2) 研究の方法

本実践における、横断的、総合的な活動場面で、他者と協働して主体的に取り組む子供の姿を見取るとともに、活動後の作文シートにおける記述から、協働的に学ぶことの実際を分析し考察する。

3 研究の実際と考察

(1) 情報を手に入れ、自ら動き出そうとする子供

カイコを飼育する際、カイコの餌となる桑の葉が必要となる。大潟区に桑の木はあるのか、家族や地域住民への聞き取り調査を行った。S子は情報収集に関わって以下のような作文（一部抜粋）を書いた。

いろいろな人に聞いてもなかなか桑の木があるという情報がありません。中には、わけを教えてくれる人もいました。今はカイコを飼っている人がいないことや、道路にするために木を切ったという人もいました。もしも、このまま桑の木が見つからなかったら、カイコなんて一匹も飼えません。これから桑の木を植えても間に合わないし、カイコを飼い終わったらどうするのでしょうか。どんなに考えても分かりません。カイコのえさの桑の葉をどうやって見つけていけばいいのでしょうか。もっといろいろな人や、地域を広げていけばいいと思います。家からすぐ近くの所でもいいから探してみます。いろいろな人からもっともっと聞いて、調べていきます。

自問自答している記述から、S子が悩んでいることが伺える。しかし、悩みながらも、「もっと人に聞いてみる。」「探してみます。」と前向きである。

同様に、Y子は情報収集に関わって以下のような作文（一部抜粋）を書いた。

友達のおばあさんに聞いたら「昔は旧道の所にいっぱいあったけれど、車道にされたからなくなったよ。」と言っていました。なので、もしかしたら旧道の近くにあるかもしれないので、今度探してみようと思いました。

桑の木はどこにあり、どこに行けば桑の葉が手に入るのか。S子やY子のように途方に暮れ、悩んでいる子供が多いため、4学年合同で情報交換会を行うことにした。

情報交換会では「ブルボンの工場の近くにあると聞いた。」「潟町5区にある。」「保育園の裏にある。」など、情報を仕入れてきた子供が目を輝かせて話した。また、「桑の葉の形はギザギザしている。」「赤や紫の実がなる。」など桑に関する情報を進んで図鑑やインターネット等で調べてきた子供の姿も見られた。さらに、養蚕で使われていた道具を持ってくる子供もいた。

情報交換会后に、「家の近所だから放課後に取りに行けそう。一緒に行かない?」「学校帰りに探してみる。」などと、子供自ら動き出そうとする姿が見られた。

(2) カイコの飼育から考え、友達の言動から考える子供

子供が進んで桑の葉探しに動き出したことで、桑の木畑はないもののカイコを飼育できるだけの桑の葉の確保の見通しが立ち、カイコの飼育を始めた。カイコは一人当たり二十頭を担当し、平日は学校で飼育し、休日は家で飼育することにした。

5月10日頃に卵から孵化したカイコは、早速桑の葉を食べ始め、すくすくと成長した。前述のように、週末は家で飼育するため、月曜日の朝になると子供は飼育箱を手に携えて登校し、「先生、カイコが脱皮したよ。」「一匹死んじゃった。病気になったのかな。」などと、家での様子を報告するのである。そして、教室に入ると「見てみて。俺のカイコさ・・・」「桑の葉をいっぱい採れる場所を見つけたよ。」などと、子供同士の情報交換が始まるのである。

飼育を始めて約3週間。3令から4令幼虫になると、桑の葉を朝あげても昼にはもう穴だらけになるほどの食べっぷりであった。桑の葉の餌やりは朝昼夕の作業となり、大変であったが、友達と協力しながら餌を取り換えたり、フン掃除をしたりすることが日常の日課となっていた。そんな中で、カイコが葉を食べる音を聴いて楽しんだり、脱皮の瞬間を観察したりと、カイコの一挙手一投足に興奮し、驚きと発見を友達と共有していったのである。

ただ、悲しい出来事も起こった。意図的ではなかったのだが、カイコが踏まれて死んでしまったのである。筆者は命について考えるよい機会と捉え、子供と話し合う時間を設けた。Y子はその時の出来事に関わって以下のような作文（一部抜粋）を書いた。

今日、カイコが踏まれて死んでしまいました。私が近くで見ると内蔵も出ていました。みんなが「殺人事件だ。」「アハハハ」などとカイコに失礼な言葉を言っていました。人に悪口を言っているように聞こえたので、思わず「かわいそう」とつぶやきました。今度からは、もっともっとカイコを大切にしようと思いました。

「カイコに失礼」「人に悪口を言っているよう」と、友達の言葉を敏感に感じ取るとともに、瞬時に自分の考えと比較、検討し、「かわいそう」と表現したことから、カイコがY子にとって大切な存在となっていることが伺えた。友達の言動から考え、「今度からは、もっともっとカイコを大切にしよう」と、自身の次の行動につなげようとする姿がそこにあった。残念な出来事ではあったが、子供が自分の言動を見つめたり、カイコへの関わりを見つめたりするきっかけとなった。

その後、子供は今まで以上に自分のカイコを大切に育てた。孵化してから40日ほど経った頃、「蚕が糸を吐き始めたよ」「繭ができるところを見たよ」と、友達や筆者に目を輝かせて報告する姿が見られた。子供はその神秘に興味津々の様子で、息をのんで観察したり、見守ったりしていた。

飼育当初は「カイコなんて気持ち悪い」と言っていた子供が、次第に愛着をもち始め、進んで桑の葉取りやふんの片付けを行い、繭づくりのための部屋を作り、糸を取るための道具を作るなど、子供は自分の思いをもち、子供同士であるいは地域住民と関わり合いながら活動をつくっていったのである。

(3) 大潟作品展に向け、仲間意識を高める子供

1学期はカイコの飼育が中心の活動であった。子供と2学期の活動を考える際、カイコの繭を使って何か作品が作れないかと話し合った。子供は、成虫の標本づくり、繭で指人形づくり、繭玉パチンコづくり、繭玉起き上がりこぼしづくり、カイコの成長の写真アルバムづくり、シルク作品づくりなど、いろいろな意見を出した。そこで、子供の思いが叶い、かつ、お世話になった地域住民にもその成果を見てもらえる場として、地域の文化祭である「大潟作品展」に出品することを提案した。そして、「大潟作品展に向けてカイコを育てる。」という目標を立て、一頭一頭を大切に育てていくことを確認した。ただ、秋ということで桑の葉の確保が難しくなることから、3歳まで成長しているカイコを仕入れて飼育することにした。

11月3日、4日の大潟作品展に向けて、2学期に育ててきたカイコの繭玉などを使った作品を作り始めた。子供は、「いろいろな人にもっとカイコについて知ってもらいたい」という思いをもち、うちわづくり、繭玉工作、成長アルバム、桑の葉・桑の実のレシピ、糸を使った刺しゅうなど、作りたいもの同士でグループになっての作業となった。今まで大切に育ててきたカイコの繭玉を使ったの作品とあって、それぞれのグループでアイデアを出し合い、協力して作る姿が見られた。子供は、想像力を働かせながら小さな繭から広がる世界を楽しんでいた様子であった。

大潟作品展当日は多くの方に来場いただくとともに、後日たくさんの方々からの感想をいただき、子供は喜んでいて、Y子は大潟作品展に関わって以下のような作文（一部抜粋）を書いた。

私は絹うちわグループでした。カイコにうちわを作ってもらいました。大潟作品展に出すので丁寧に説明書を書き、キャラクターも作ってみました。そのキャラクターの吹き出しには、自分で思ったことや知ったことを書いてキャラクターを生かしました。

作り終わった後は、繭玉動物園の手伝いをしました。新しい動物作りと動物の餌づくりや柵作りなどをしました。自分たちのグループが終わってもほかのグループの手伝いができてよかったです。

見てくれた人の感想の中で、九十六才の方が、「昔は大潟にも糸をとる工場があった」と書いてあったので、大潟は昔からカイコが盛んだったのだと思い、調べたくなりました。すごい新発見でした。

同様にS子は大潟作品展に関わって以下のような作文（一部抜粋）を書いた。

感想を読んでもどれくらい褒め言葉でした。がんばって作るとうれしい気持ちが二倍にも三倍にもなることができました。びっくりしていた人もいたし、懐かしいと書いてくれた人もいて、すみずみまで見てくれていたんだと思いました。今後は、昔あったカイコの工場を調べていきたいです。もう一つは、大潟の人たちにカイコのことをもっと教えたいです。

Y子とS子に共通しているのは、大潟作品展をきっかけとして、そこでの間接的な人との出会いにより新たな発見があり、新たな調査意欲が生まれているという点である。

また、Y子のように、自分のグループの作業が終わると他のグループの作業を進んで手伝う姿からは、みんなでプロジェクトを成功させるという思いが伺え、仲間意識の高まりが感じられた。

(4) 地域のお年寄りとの交流を通して、相手意識が芽生えた子供

S子をはじめ、多くの子供がこれまでの自分たちがやってきたことが認められ、自信をもった。「大潟の人たちにもっとカイコのことを教えたい」という思いから、筆者は大潟の方と子供とのもっと親密な関わりができないかと考えた。総合的な学習の時間の地域コーディネーターの方に相談をすると、お年寄りの方との交流ならできそうとの返答を得た。子供に、お年寄りにこれまでの成果を発表し、一緒に繭玉工作ができることを伝え、子供は発表内容ごとにグループを作り、相談しながらポスター等にまとめるなどの準備に主体的に取りかかった。

以下に示すのは地域のお年寄りとの交流後のS子の振り返り作文（一部抜粋）である。

私は桑の葉の料理のレシピ集を発表しました。聞いてくれた皆さんは、前の人は前のめりになって、後ろの人はほぼ全員立って聞いてくれました。発表が終わった時も「これ見せてくれる。今度作ってみようかな。」と言ってくれました。この時すごくうれしかったです。

繭玉工作では、おばあさんと一緒にパンダとサルを作りました。パンダを作ろうとしたとき、見本のパンダがなくて、自分で作るしかありませんでした。その時は不安でした。理由は、自分用なら失敗してもいいのですが、人にあげるものなので、その方の家族が見て「なんだこれ」となったら恥ずかしいからです。でもやってみました。するとまあまあです。おばあさんはたくさん褒めてくれました。心が温かい気持ちになりました。

この記述の中の「自分用なら失敗してもいい」「人にあげるものなので、その方の家族が見て『なんだこれ』となったら恥ずかしい」という言葉からは、相手意識が生まれていることが伺える。次に示すのはY子の振り返り作文（一部抜粋）である。

繭玉工作では子供一人につき一人のお年寄りがつくことになっていました。私はおばあさんとウサギとサルを作りました。ウサギは綿に乗せて雪の中のように作り、今の季節にぴったりです。サルはバナナの木の上に乗せてみました。おばあさんは「かわいいね。本当にありがとう。大切に作るからね。」と言ってくれたので、また、会えたらいいなと思いました。

今回は、お年寄りとおふれあえてとても楽しかったです。自分もカイコを飼ったから今につながっているんだと思うと、カイコに感謝したいです。

この記述の中の「カイコを飼ったから今につながっている」という言葉からは、Y子にとって、カイコが学習活動のパートナーであることが伺える。これまでのカイコとの関わりから、Y子にとってカイコはより大切な存在となったのである。それが、「カイコに感謝したい」という言葉にも表れている。この言葉は、他者との交流がもたらしたものであると考える。

(5) 「カイコのおくりもの」とは

1年間の活動を振り返り、子供と「カイコのおくりもの」とは何だったのだろうかとお話合った。

C：カイコから繭玉ができて、その繭玉から生糸がとれ、その糸でうちわができた。

C：カイコの命がおくりものだったのではないかな。

C：繭玉を使って工作をして大潟作品展で展示したり、お年寄りと交流したりした。

C：人との出会いがおくりものだったのではないかな。

C：生き物を育てる難しさを感じたよ。

C：そうそう、親の気持ちが少し分かった気がした。

T：それってどうということ。

C：育てることってどういうことかを考えることかな。

C：元気や笑顔を私たちにくれた気がする。

子供は自分の体験を基に考え、様々な視点から思いを語った。出された意見についてみんなで検討すると、大きく二つに分けられた。一つは繭玉や生糸、人との出会いなどの目に見えるおくりもの、二つはカイコの命や元気や笑顔などの目に見えないおくりものであった。

以下に示すのは話し合い後に書いたS子の振り返り作文（一部抜粋）である。

カイコのおくりものは、私にまだまだ調べたいと思わせてくれたことです。昔のカイコを育てたときの様子を知り、わくわくできました。こう思わせてくれたのはカイコのおかげです。大潟作品展やいきいきサロンでお年寄りとの交流ができたのも全部カイコのおかげです。

S子が真っ先に書いたのは、「私にまだまだ調べたいと思わせてくれたこと」である。そして、「大潟作品展やいきいきサロンでお年寄りとの交流ができたのも」という記述は、友達との話し合いを経て付け加えられたもので、自分自身の考えと話し合いで得た新たな考えを取り入れながら自分の言葉でまとめている。また、二度書かれた「カイコのおかげです」という言葉からは、S子にとってカイコが学習活動のパートナーになったことも伺えた。まさに、S子がカイコと協働しながら一年間諸活動に取り組んできたからこそこの言葉である。

このように、子供と教師での検討を通して、子供は納得解を見いだしたのである。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

3 (1)で示した桑の葉集めの場面では、自分で調べたり、地域の人に聞いたりして多様な情報を手に入れた子供は、情報交換の場で自信をもって伝え、聞く方も桑の葉がないと困るという切実感からしっかりと聞こうとする姿が見られた。

また、3 (3)で示した大潟作品展に向けた取組や、3 (4)で示した地域のお年寄りとの交流会のように、地域と関わる機会を設けたことは子供の主体性の発揮に有効であった。自分一人ではなかなか成し得ないことであるが、仲間と共に試行錯誤しながらも力を合わせることで実現に至った。

これらの事例から、自身の自己肯定感を高めるとともに、他者と関わる中で、友達のよさに気付くことができることが、協働的に学ぶことの意義と言えるのではないかという新たな知見が得られた。

さらに、3 (2)で示した子供の姿や、3 (5)で示した子供の姿からは、異なる視点から考え、自分自身や学級で納得解を見付けていく様子が見取れた。多様な他者との意見交流は、互いの考えを深めるとともに、S子が「私にまだまだ調べたいと思わせてくれた」と記したように、物事の決断や判断につながり、結果としてより主体的な学習活動へと向かっていったのである。このS子のような子供の姿は、協働的に学ぶことの意義を示しているものと考えられる。

(2) 今後の課題

今回の実践研究を通して、協働的な学習は子供の主体性の発揮につながるという協働的な学習のよさや意義が実感できた。しかし、今回は総合的な学習の時間における一実践に過ぎない。協働的に学ぶことは総合的な学習の時間だけではなく、学校教育全体で進めていく必要を感じた。なぜなら、多様な他者と生活を共にする学校だからこそできることで、また、地域にある学校だからこそできることで、そこに学校の意義があると考えられるからである。

引用・参考文献

- 1) 平野朝久『はじめにこどもありき－教育実践の基本－』学芸図書株式会社, 1994年, p.23
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版, 2018年, pp.119-120
- 3) 牛山栄世『学びのゆくえ 授業を拓く試みから』岩波書店, 2001年, p.113
- 4) 同上書, p.120